

14. 間質性肺炎

■病態および臨床症状

肺胞壁や細動静脈周囲などの間質の炎症性疾患です。

急性型では薬剤投与開始から数時間～10日後に発熱や呼吸困難などの症状から発症し、慢性型では薬剤投与後6カ月～数年の経過後に徐々に咳、労作時の呼吸困難などの症状が現れます。

■症例報告

患者	性・年齢	男性 20代
	使用理由 (合併症)	発熱 (感冒)
1日投与量/投与期間	ボルタレン錠 8日間の間で2～3日服用	
風邪気味で咳嗽、39℃台の発熱があり、近医受診。ボルタレン錠、塩酸セフカペンボキシル、非ピリン系感冒剤、胃薬を処方された。2、3日服用後、4日間は2、3回ボルタレンのみを服用し、5日目に、ロキソプロフェンナトリウム、セラペプターゼを内服。		
時間経過	症状および処置	
投与9日後 発現翌日	夜、階段を昇降時に呼吸困難。 塩酸セフカペンボキシル、非ピリン系感冒剤、ロキソプロフェンナトリウム、胃薬を2日分内服したが、咳嗽、呼吸困難感の改善を認めず。	
7日後	救急外来を受診、胸部X線写真では明らかな異常所見を認めず、クラリスロマイシン、カルボシステイン、臭化水素酸デキストロメトルファン処方を受けた。症状の改善を認めなかった。	
10日後	外来受診、再度クラリスロマイシン、塩酸プロムヘキシン、塩酸エプラジンを処方されたが改善せず。	
12日後	再診し、動脈血ガス分析でPaO ₂ 68.8Torrと低値であったため入院。肺の微小塞栓の可能性を考え、ヘパリン1万単位/日の投与を開始したが、PaO ₂ の改善は認めず。	
18日後	胸部CT検査にて過敏性肺臓炎、薬剤性間質性肺炎を疑った。	
21日後	経気管支肺生検(TBLB)を施行。	
23日後	気管支肺胸洗浄(BAL)を施行し、薬剤性間質性肺炎に矛盾しなかった像であった。気管支鏡検査施行後PaO ₂ 、自覚症状はともに回復を認めたため、ステロイドの投与は行われず経過をみた。末梢血で施行したリンパ球幼若化試験で、ボルタレンのみ陽性と判明した。	
28日後	退院。	
併用薬	ロキソプロフェンナトリウム、塩酸セフカペンボキシル、セラペプターゼ、非ピリン系感冒剤	

■主な対処(処置)方法

- ・症状に気づいた時点での服薬中止により改善がみられる場合がある
- ・重症例では副腎皮質ステロイド薬の投与